

シンガポールのムスリム女性たちにとってのジェンダーとイスラームの交差：ムスリム女性たちによる『プルンプアン』の出版から

著者	市岡 卓
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化．論文編
巻	22
ページ	131-155
発行年	2021-04-01
URL	http://doi.org/10.15002/00024086

〔論文〕

シンガポールのムスリム女性たちにとっての ジェンダーとイスラームの交差

——ムスリム女性たちによる『プルンプアン』の出版から——

Intersectionality of gender and Islam for Muslim Women in Singapore

——Publication of “Perempuan” by Muslim Women——

国際文化研究科兼任講師

市岡 卓

ICHIOKA Takashi

序論

本研究は、現代のシンガポールにおけるムスリム（イスラーム教徒）女性たちの出版活動を通じた異議申立てについて検討し、ムスリム女性たちにとってのジェンダーとイスラームの交差に関わる問題について考察することを目的とする。

本研究では、シンガポールのムスリム女性たちが女性であり、かつ、ムスリムでもあるためにジェンダー平等をめぐる困難が増すことを、「二重のマイノリティ」の問題ととらえ論じる¹。これによって、マイノリティの女性たちが経験する様々な「二重のマイノリティ」の問題を考えるための示唆を提供することに、本研究の意義がある。

関連する先行研究は、①ジェンダーとマイノリティの交差に関する研究、②イスラームとジェンダーの接点に関する研究、③シンガポールの女性の市民運動に関する研究の三つのカテゴリーからなる。

ジェンダーとマイノリティの交差に関する研究としては、上野千鶴子の「複合差別」に関する研究がある。上野は、複数の差別が、「蓄積的に重なった状態」にあるだけではなく、「それを成り立たせる

複数の文脈の中でねじれたり、葛藤したり、ひとつの差別が他の差別を強化したり、補償したり、という複雑な関係にある」と述べる²。そして、具体的に、非差別者の社会的集団の中で女性差別を問題化することが、集団の不利益につながるとしてその集団の男性からの非難を招く事例や³、先進国の女性が発展途上国の女性の抑圧を問題化することが、先進国が教え導く姿勢を見て取る当事者の女性の反発を買うといった事例⁴を論じている。このように上野は、ジェンダーの立場からの公正を追及することが、階級や民族としての利益など、別の公正と衝突する場合があることを指摘する。

イスラームとジェンダーの接点に関する研究としては、長沢栄治の見解を参照する。長沢は、「イスラームとジェンダー的正義（公正）の対立、すなわちイスラームと女性の抑圧を短絡的に結びつける」「単純な二項対立」的な見方に安易に与することなく、「イスラームを通じてジェンダー的公正とは何かを問う試み、あるいは争い」に目を向けるべきと指摘する⁵。

シンガポールの女性の市民運動に関する研究としては、田村慶子によるものがある。田村は、ジェンダー主流化の推進に消極的なシンガポール政府が、女性たちによる市民運動を厳しく規制してきたことを指摘する⁶。また、現地の研究者である Shahirah Mahmood は、ムスリム社会の女性団体が政治的な問題から距離を置き、ジェンダー平等の問題には関わってこなかったことを指摘する⁷。

本論文では、2016年以降のシンガポールのムスリム女性たちの市民運動の動向に注目する。彼女たちの出版を通じたジェンダー平等を求める異議申立ては、彼女たちが女性であり、かつ、ムスリムであるために、一層大きな困難に直面している。本研究は、上記の先行研究を総合的に参照することにより、ジェンダーとイスラームの交差がもたらす問題に対し、シンガポールのムスリム女性たちがどのように対応しようとしているのかについて分析を行う。

本研究においては、特にムスリム女性たちが出版した書籍『プルンブアン』に注目し、その内容について、関係者からの聴き取り結果を踏まえ、整理・分析を行う⁸。その上で、シンガポールのムスリム女性たちにとってのジェンダーとイスラームの交差の問題について考察を深める。

1 シンガポールにおけるジェンダーとムスリムをめぐる状況

(1) ジェンダーをめぐる状況

シンガポールにおいては、ジェンダー主流化を推進する組織の設置、国家としての計画作成、特別措置などは行われてこなかった。政府は、限られた人材を経済発展のために有効に活用するため、メリトクラシー（能力主義）を徹底させ、男女間や異なるエスニック・グループ間での格差解消には取り組んでこなかった⁹。近年では、女性の社会進出が進み、2018年のジェンダー不平等指数は世界9位と、平等度では高いランクにある。しかし、女性NGOは男女間の賃金格差（16.3%）などが依然課題であると認識している。

ジェンダー平等を求める市民団体としては、「行動と研究のための女性協会（Association of Women for Action & Research: AWARE）」が1985年の設立以来、活動を続けている。シンガポールのNGOは政府の厳格な監視・規制の下にあり、自立的な立場から政府に対してアドボカシーを行うようなNGOはほぼ皆無である。AWAREは、調査・研究を活動の中心に据えることで実績を上げているが、それでもなお、常に政府の意向に気を配りながら自制に努めることを求められている¹⁰。

シンガポールは、1979年に発効した女性差別撤廃条約（Convention on the Elimination of All Forms of Discrimination against Women: CEDAW）を1995年に調印したが、現在も第2条（差別の撤廃のための政策）、第11条（雇用）、第16条（婚姻・家族関係）の一部の条項を留保している。国連の女性差別撤廃委員会（Committee on the Elimination

of Discrimination against Women) は、これら条項に対する留保の解除を勧告している¹¹。政府は、第16条の留保は、マイノリティであるムスリムがイスラーム法を実施する権利を保護するためであると説明している¹²。

(2) ムスリムをめぐる状況

ムスリムは人口の14.0%を占める¹³。その大半(83.9%)が、公式のエスニック・グループの区分でいうと島嶼部東南アジアの先住者であるマレー人であり、そのほかに南アジアに起源を持つインド人、中東に起源を持つアラブ人がいる¹⁴。ムスリムの大半がマレー人であることなどから、「マレー人」と「ムスリム」が同一視されることが多い。

マレー人は、華人・マレー人・インド人の三大エスニック・グループの間では、教育、所得、職業など社会的地位の面で他に大きな格差をつけられている¹⁵。このことは、マレー人(ひいてはムスリム)に対する「勉強・仕事ができない」、「勤勉でない」といったステレオタイプや差別の原因となってきた¹⁶。マレー人(ムスリム)は、ヘイト行為や暴力の対象になることはないが、労働市場での差別に直面しており、このことがさらに彼らの社会的地位を引き下げることにつながる¹⁷。加えて、イスラーム過激主義をめぐる国内外の動向¹⁸は、ムスリムに対する偏見を助長し、上記の問題をさらに深刻化させることになる¹⁹。

政府はマイノリティであるムスリムに対し、結婚や相続など一部の私法の領域でイスラーム法の実施を認めている。これが、(1)で述べたように、政府がCEDAWの第16条(婚姻・家族関係)を留保する理由となっている。ムスリムの男性だけに複婚が認められること、ムスリムの女性だけに結婚に際し男性の後見人が必要となること、遺産相続の際に女性の相続分が男性の半分となること、夫が自分の意思で一方的に妻を離婚できることなどが、関連するイスラーム法の規定である。このような特例は、1965年のマレーシア連邦からの分離・独

立に伴い、マイノリティの立場になったマレー人（ムスリム）に対し、マレーシアのムスリムと同様のイスラーム法の実施について配慮が行われたという歴史的経緯によるものである²⁰。エスニック・グループ間の大きな社会的格差が解消されない中で、マイノリティへの配慮としてのこのような特例の政治的な意味は無視できない。

シンガポールを含む島嶼部東南アジアでは、地域の文化と共存する穏健な（宗教実践において厳格ではない）イスラームの信仰が伝統的に実践されてきた²¹。しかし、1970年代以降、世界的にも、また、東南アジアでも、「イスラーム復興」が進み、ムスリムがより厳格な宗教実践を追及するようになっている。このことは、現代の国際社会で主流となっている人権感覚からみれば「女性差別的」とみられるイスラーム法の規定についても字句通り解釈・実践することをよしとする方向性につながる。

ムスリム社会の女性NGOとしては、PPIS（Persatuan Pemudi Islam Singapura: マレー語で「シンガポール・ムスリム女性協会」の意味）という団体が存在する。PPISは1952年に設立され、国内に16か所の拠点を持つ。シングルマザーの家庭への支援、仕事を持つ親に代わって子供に育成プログラムを提供する施設の運営、幼児教育の提供など幅広い事業を展開する²²。政府は、福祉への財政支出を最小限に抑えるため、政府に代わって福祉事業を実施する多数の民間団体に対する助成を行っている。PPISはAWAREのようにジェンダー平等を推進するための活動は行わず、政府の助成を受けながら専ら福祉分野で活動している²³。

2017年には、シンガポールにおけるCEDAWの実施状況について検討する女性差別撤廃委員会に対し、初めて女性NGOが共同でレポートを提出した。取りまとめを担った女性NGOは、イスラーム法の規定の問題も含め、ジェンダー平等の実現のため改善が必要と考える事項について取りまとめ、約60の団体の連名で同委員会に提出することを目論んでいた。しかし、多くの団体から賛意を得ることができず、

最終的には13の団体のみによる共同レポートとして提出を行った。PPISは「様々なムスリム女性の声のバランスを取り、反映させるべき厄介な立場にある」との理由から、このレポートに賛成しなかった²⁴。

このような状況の下で、ジェンダー平等を訴えるムスリム女性たちは、AWAREに参画して活動している。

2 『プルンプアン』の出版の経緯

(1) Gender Equality IS Our Culture プロジェクト

本論文で論じる出版物『プルンプアン』は、AWAREの活動から生まれたものである。

AWAREは、国連のジェンダー平等基金（The Fund for Gender Equality）の助成を獲得し、2013年から3年間のGender Equality IS Our Culture プロジェクト（GECプロジェクト）を実施した。同プロジェクトは、ジェンダー平等と合致しない「文化的慣行」によって、CEDAWの完全な実施が妨げられているという問題意識の下、そのような「文化」をジェンダー平等の観点から解釈し直すことを目的としていた。イスラーム法の問題は念頭に置かれていたが、あえて「イスラーム」や「宗教」を前面に出すことは避けられている。

同プロジェクトは、ワークショップや講演会などを通じ多様な議論の場を提供した。ジェンダー平等の観点からのイスラーム法の見直し、「イスラームに由来するとしばしば考えられてきた」「家父長制的文化」、セクシュアリティに関わる問題について議論する場も設けられた。

(2) 『プルンプアン I』の出版

2016年10月、GECプロジェクトの一環として、*Perempuan: Muslim Women in Singapore Speak Out*²⁵が出版された。“perempuan”（プルンプアン）はマレー語で「女性」のことである。2018年に出版された続編に対しシリーズの一冊目に当たるため、本論文では便宜上『プ

ルンプアン I』と言う。また、これと続編を合わせ単に「『プルンプアン』」と言う。

『プルンプアン I』の冒頭の解説によれば、同書はセクシュアリティ、身体に対するイメージ、文化といった、これまでほとんど議論されなかった、あるいは、タブー視され公に語られなかったテーマを取り上げるものである【PI: i-iii】²⁶。この後に続く「巻頭言」によれば、シンガポールのムスリム女性たちは、家庭での娘や母親という立場から、本当の願望や意志を面に出さないことを期待されている【PI: v-vi】。さらに、マレー人（ひいてはムスリム）に対するステレオタイプを持つ社会も、ムスリム女性の抑圧に働く。すなわち、『プルンプアン I』は、ジェンダー面の不平等や非対称的な民族・宗教間の関係から抑圧され、自由な意思表示が許されなかったムスリム女性が自由に発言できる場を提供することを目論んでいた。

『プルンプアン I』は、市民活動家、学生、職業を持つ女性など様々な立場、様々な年齢階層のムスリム女性が、彼女たちの体験をもとに執筆したエッセイ 31 点を収録しており、全 151 頁からなる。女性への社会的期待、女性の身体の管理、マイノリティへのステレオタイプ・差別など多様にわたるテーマを取り扱っている。

寄稿者のムスリムはマレー人に限らず、インド人、アラブ人も含まれる。また、マレー人の母語であるマレー語ではなく、英語で記述されており、シンガポール社会全体をターゲットとしている。

『プルンプアン I』の出版は、ムスリムを主な購読者層とするマレー語紙 *Berita Harian* だけでなく、国民全体を対象とする英語紙 *Straits Times* でも取り上げられ、売上は約 400 部に達した。人口 600 万人に満たない（外国人を除くと 400 万人に満たない）シンガポールでは、成功と言ってよい数字であると同関係者は認識している²⁷。ムスリム女性がジェンダーに関わる問題について出版という手段を通じ、まとまって声を上げたことは、かつてなかったことであり²⁸、この点で『プルンプアン I』は

注目を集めた。また、『プルンプアン I』では、セクシュアリティ、FGM (Female Genital Mutilation: 女性性器切除) など、ムスリム社会ではタブーとされ語られることが少なかったテーマも取り上げられた。特に、経済発展を遂げた現代のシンガポールにおいても FGM が行われていることは、『プルンプアン I』の出版後、西洋メディアでも注目された²⁹。

(3) 『プルンプアン II』の出版

GEC プロジェクトは2018年までの5年間に実施期間が延長された。AWARE は当初は『プルンプアン I』の続編の出版は考えていなかったが、『プルンプアン I』への「圧倒的な支持」を得たと自認する AWARE は、2018年9月に続編である *Growing Up Perempuan* (以下『プルンプアン II』と言う。) を出版した。

『プルンプアン II』は、『プルンプアン I』と似た構成を取っており、様々な立場、様々な年齢階層の女性による計54点のエッセイや詩を収録し、全276頁からなる。『プルンプアン I』は市民活動家やオピニオン・リーダーのような立場の高学歴の女性による問題提起が中心であった。これに対し『プルンプアン II』は、貧困層としての生活、離婚やドメスティック・バイオレンス (DV) を経験した女性たちが自分たちの経験をありのままに語るエッセイ (一部はインタビュー記事) や、更生施設で暮らす少女たちが過去への後悔や将来の希望に対する思いをつづった短いエッセイや詩も収録している。セックスワーカーとして働くシングルマザーまでもがエッセイを寄稿していることは、女性の貞節を重んじるムスリム社会の空気を考えると、驚きに値する。

『プルンプアン II』は『プルンプアン I』と比べはるかに幅広い年齢・社会階層の女性の生の語りを扱っており、ムスリム女性の多様な生き様を一冊の本にまとめたユニークな出版物となっている。『プルンプアン I』と同様に、女性への社会的期待、女性の身体の管理、マイノリティ

へのステレオタイプ・差別などについて問題提起を行うほか、人生に困難を抱える周縁化された女性たちの厳しい実像を伝えている。

『プルンプアン I』と同様に収録されたエッセイは英語で記述されている。

(4) 『プルンプアン』出版の意義

『プルンプアン』は、非常に幅広い属性を持つ女性により生きられた体験をありのままに描くことで、シンガポールのムスリム女性が、女性であり、かつ、ムスリムであるために直面する困難を明らかにしている。それは、彼女たちが置かれている現状についての告発であり、異議申立てでもある。彼女たちはムスリム社会の中で発言を思いとどまることを強いられてきた。実際に出版後に、貧困やDV、シングルマザーの問題など、「遅れた」ムスリム社会の「特有の」問題ともみなされがちな、ムスリム社会のいわば恥部をさらすことへの否定的な反応もあったと寄稿者の一人は筆者に語っている³⁰。

『プルンプアン』の出版は、これまで声を上げることを逡巡してきたシンガポールのムスリム女性たちがまとまって異議申立てを行った点で、画期的な事件であった。それは、ジェンダー平等の実現に向けたムスリム女性たちの市民活動の成熟を示すものとも言える。

3 『プルンプアン』の内容

『プルンプアン I』および『プルンプアン II』の合計85点のエッセイの内容を整理し、ムスリム女性たちの経験や、何に対し異議を申し立てているのかを明らかにする。

エッセイの内容は、概ね以下のように6つのテーマ別に分類できる。テーマの表記順はそれぞれに属するエッセイの点数が多い順であり、分類名の後にエッセイの点数を示す。その他、寄稿者がその時々の方持ちの動きを記したエッセイなど上記のいずれにも分類することが難

しい17点は、研究目的上、分析対象から除外した。複数のテーマに関係するエッセイはそれぞれのテーマに重複して分類したため、(1)～(6)の合計点数に上記の17点を加えた合計は109点となり、エッセイの合計点数85件とは一致しない。

- (1) 身体性（身体の管理、FGM、セクシュアリティ）（25点）
- (2) 社会的期待（15点）
- (3) 貧困・家庭問題（DV、離婚など）・非行（15点）
- (4) 信仰のあり方（12点）
- (5) 民族・宗教アイデンティティ（マイノリティとしての差別・排除、エスニシティに関わるステレオタイプ、ムスリム社会の中の多様性）（12点）
- (6) 性的少数者（LGBT）（10点）

以下に、テーマごとの内容を示す。

(1) 身体性

女性の身体の管理に関するもの17点、FGMに関するもの6点、セクシュアリティに関するもの2点、合計25点を「身体性」に関わるものとしてこれに分類した。

第一に、女性の身体の管理に関するエッセイでは、ある寄稿者は、女性の身体はムスリム社会の管理の対象となり、女性は自分の身体について自己決定権を持つことができないと述べている【PI: 127-130】。女性は肌を露出しないような「慎ましい」服装をすることを求められ、着るものを周囲から監視される【PI: 9-13】。ショートパンツや体の線が出る服を着ると母親に注意される【PI: 69-73】。ヒジャブ（ムスリム女性が信仰上の理由から髪を隠すためのスカーフ状の布）をつけるかどうかで、「正しいムスリムかどうか」が判断される【PI: 9-13ほか】。

ある寄稿者は、自分が出演するダンスのリサイタルを母が見に来ることを知り、レオタード姿を見られたくないために開演の直前に姿を隠した経験を語っている【PI: 147-152】。

寄稿者たちは、服装によって「男性の目を引く」のを非難されることについて、男性の性欲の問題を女性の責任にするのは不当だと訴える【PI: 103-106】。また、信仰は心の問題であり、服装とは関係のないものと言う【PI: 159-165ほか】。寄稿者たちは、女性の身体があたかも「公共の財産」のように扱われることに反発し【PI: 103-106】、女性が自分の身体を取り戻すべきだと主張する【PI: 9-13】。ある寄稿者は、女性の身体の管理は宗教ではなく「文化」に関わる問題であり、多様性を尊重するイスラームは、女性が身体への自己決定権を持つことと矛盾しないと述べる【PI: 9-13】。また別の寄稿者は、幼少時から体を露出しないと言われ続けてきたが、舞台上に立ち体をさらすことはイスラームに反しないと考え、演劇を自分のジハード（闘争）³¹だと考えながら続けている【PI: 15-20】。

第二に、FGMに関するエッセイが6点ある。GECプロジェクトの中で議論になったことにより、シンガポールのムスリム社会でFGMが一般的に行われていることが明らかになった³²。寄稿者たちは、FGMが女性に対する暴力であると同時に、女性たちがまだ自分の意思を表明できない乳幼児の時に行われるものであることから、女性の身体に対する自己決定権を奪うものであるとして、FGMに強く反対している【PI: 35-37ほか】。ある寄稿者は、FGMはクルアーンに根拠のない「文化的な習慣」であり、やめるべきだと述べる【PI: 85-87】。また、ムスリムたちがFGMが女性の性欲を抑制する効果があると考えることに対し、ある寄稿者は、「では男性の性欲を抑制するために何が行われているのか」と問う【PI: 143-145】。彼女は、FGMについて語ることはタブーとされてきたが、オープンに議論すべきだと言う。

第三に、セクシュアリティに関するエッセイ2点は、ムスリム社会におけるセクシュアリティに関する規範に疑問を投げかけている。結婚前は処女性が重視され、婚外性交渉が禁じられる一方で、一定の年齢になると結婚して夫に性的喜びを与えるべきとされる。一人の寄稿者は、女性の価値がセクシュアリティと固く結びつけられ、女性の尊厳が夫の喜びで測られていると指摘する【PII: 266-271】。また、結婚がセックスを合法化するものとしてとらえられ、「セクシュアリティの管理・取締りの手段」となっていることを疑問視する。彼女は、「より成熟した愛とセックスへの理解」が必要だと述べる。もう一人の寄稿者は、ムスリム社会の「文化」としての結婚観が現代の価値観に合わず、女性の自己決定を制約していると主張する【PI: 131-135】。

(2) 社会的期待

女性に対する社会的期待に関するもの15点をこれに分類した。

ムスリム社会では、女性が高い学歴を得なくてもよいとか、女性は家庭の切り盛りをしていればよいという考え方が強かった。寄稿者たちが述べている母や祖母の体験は、明確にそのことを物語っている。しかし、寄稿者たちは、女性の社会進出を望まない考え方は現在もなお残っていると言う【PI: 1-5】。ある女性は、学者であった預言者の妻アイシャを例に挙げ、「女性に高い教育はいらない」という考え方は宗教に根拠はなく、「文化」に根付く家父長制的な考え方だと論じる【PII: 132-138】。女性がキャリアを持つことも認められるようになってはいるが、それは夫や子供の世話に加えてのことであり、一方で男性は家庭での役割を期待されないために、女性の負担が増していると言う【PII: 93-100】。

女性に対するその他の様々な制約がなお多いことも論じられている。一人の寄稿者によれば、女性は常にあれをするなこれをするなど干渉され（「煙草を吸うな」とも言われる）、余計な発言を控えるよう

に言われる【PI: 103-106】³³。もう一人は、マレー人社会では、未婚の女性は親の保護下にあるという家父長制的な考え方がまだ残ると言う【PII: 73-80】。

別の寄稿者は、大叔母が巻き込まれた相続トラブルの解決に骨を折ったにもかかわらず、大叔母の遺言を執行する自分の父の代理人に指名されなかった。彼女は、ただ男であるという理由だけで父が息子を指名したことを、「裏切り」と感じている【PII: 88-92】。

(3) 貧困・家庭問題・非行

貧困下での生活、DVや離婚など家庭での問題および非行に関し、当事者が体験を語ったもの15点をこれに分類した。

関連するエッセイでは、両親の離婚、親からの育児放棄、親または夫によるDV、親、夫または自分自身の犯罪による収監、家族でのホームレス生活、レイプによる妊娠・出産など、人によって様々であるが、寄稿者たちのすさまじい体験が語られる。経済発展を遂げ、一人当たりGDPではカタルを除きアジアでトップの地位を得たシンガポール社会の影の部分を見る思いがさせられる。

ある寄稿者は、両親の離婚、ホームレス生活などを経て、妻子がある男性の3番目の妻になった。夫は暴力を振るい、セックスを強要し、性奴隷のような生活になった。逆らうと、夫に逆らう妻はイスラームに反すると言われた。離婚してムスリム関係団体に助けを求めても、非難されるだけで支援を得られなかった【PII: 209-217】。

両親の離婚、母からの暴力、自身の離婚などを経て、シングルマザーとして二人の子供を養うためにセックスワーカーになった女性も寄稿している。女性たちはそれぞれやむを得ない事情があつてセックスワーカーをしているが、セックスワーカーは反道徳的とか、助けるに値しないとといったステレオタイプにさらされ、特に宗教指導者にそのような見方が強いと、彼女は指摘する。彼女は、セックスワーカーも

他の職業と同じように尊重されるべきだと考え、セックスワーカーを支援するNGOの運営に関わっている【PII: 41-47】。

非行については、更生施設で暮らす4名の少女が自身の経験や社会復帰への希望を語っている。うち2名は、イスラームへの信仰を通じ立ち直ろうとしている【PII: 166-167およびPII: 168-169】。

イスラームが人生をやり直そうとする女性たちの心の支えになることは事実であり、実際にイスラーム関係団体が犯罪を犯した人々や薬物中毒者の更生施設を運営している事例は多い。一方で、セックスワーカーの例にみられるように、困難の中にある女性に対しステレオタイプを持つ宗教関係者がいることも、関連するエッセイは明らかにしている。

(4) 信仰のあり方

イスラームの信仰のあり方に言及したものの12点をこれに分類した。

いくつかのエッセイで、服装や儀礼のことで他の人々を非難する「信仰の深い」ムスリムのことが語られる【PI: 159-165ほか】。ある寄稿者は、結婚式でヒジャブから首が出ているのを注意された経験を語っている（ヒジャブは髪だけでなく、首、胸元まできちんと覆うのが正しいとされている）。彼女は、非常に些細な振る舞いを道徳の問題にすること、他人の振る舞いに過度に干渉することを、表面的な信仰であると考え、もっと重大な社会問題に関心を持つべきだと主張する【PI: 153-158】。同様に考える他の寄稿者は、服装で信仰の深さが決まるのではないと言い【PI: 159-165】、また別の寄稿者は、信仰は自分と神との関係だけであり、人間が他の人間を非難するものではないと言う【PII: 35-40】。

イスラームの解釈がジェンダーの問題に与える影響についても論じられる。「(2) 社会的期待」で紹介した、男女の役割について述べた寄稿者は、宗教講師の講演では、女性が家庭を切り盛りする責任が強

調され、一方で男性には同様の役割があまり期待されないと言う。彼女は、2017年にマレー語紙で、読者からの相談に対し「夫は教育のために妻を打ってもよい」と宗教指導者が助言した例を引きながら、「古いイスラームの解釈に従うのではなく」、「ムスリムの女性とは何なのかを自分たちで決定するべきだ」と述べる【PII: 93-100】。

棄教した女性からの寄稿もある。彼女は、ジェンダー平等とイスラームが両立しないと考えるようになり、宗教教師からも満足のいく答えが得られなかったために棄教した。しかし、両親に棄教を明かすことはできず、表面上だけ信仰を実践する「二重生活」を送っている【PII: 228-232】。

(5) 民族・宗教的アイデンティティ

マイノリティとしての差別・排除、エスニシティに関わるステレオタイプに関するもの9点、ムスリム社会の中の多様性に関するもの3点、合計12点をこれに分類した。

マイノリティとしての差別・排除、エスニシティに関わるステレオタイプに関するエッセイでは、華人がほとんどでマレー人がわずかしかない環境で、華人がみな華語（中国標準語）で話をし、英語で話してくれないという形での排除の経験が語られている。一人はそうした会社での経験【PI: 45-52およびPII: 24-30。同一人物によるもの。】、一人は進学校での経験について述べている【PII: 35-40】。前者の女性は、『プルンプアンⅠ』に寄稿したことを聞いた会社の同僚から「マレー人は普通あまり頭がよくないのに、あなたは頭がいい。」と言われたことを『プルンプアンⅡ』に書いている。

後者の女性は、マレー人であることがいやで、肌を白くすることに一生懸命だったと言う。別の女性は、華人とマレー人の混血だが、小学校では、「怠惰で愚か」だとみられてしまうマレー人たちとはつき合わず、自分は華人だと言っていた【PII: 228-232】。このほかにも、華人に似た外見のマレー人女性が、マレー人へのステレオタイプを避

けるため、マレー人から遠ざかるようになったことを語っている【PII: 187-192】。さらに、インド人ムスリム女性が、ムスリムへのステレオタイプを避けるため、学校でインド人やマレー人独特のくせない英語を話すよう努力したと語っている【PII: 193-194】。

シンガポールでは民族・宗教間の融和のための様々な政策が実施されているが、定着したステレオタイプや差別は解消していないことが、女性たちの語りから読み取れる。ステレオタイプや差別の対象となる当事者たちがそれを内在化し（寄稿者たちもそれを認めている）、その回避のための行動を取っていることは、非常に深刻な事態と言えよう。

ムスリム社会の中の多様性に関するエッセイ3点は、シーア派、アラブ人、インド人のムスリム女性がそれぞれ寄稿している。シーア派の女性は、スンナ派が圧倒的多数を占めるシンガポールにおいて、中東における政治動向等の影響もあり、シーア派に対するステレオタイプが広まっていることを懸念している【PII: 57-62】。アラブ人の女性は、アラブ人、中でも預言者ムハンマドの血を引く人々の間にあるエリート意識を批判的に論じている【PII: 183-186】。インド人ムスリム女性は、ムスリム社会の中でインド人ムスリムが感じる差別を取り上げている【PII: 193-194】。

（6）性的少数者（LGBT）

性的少数者（LGBT）の人々が直面する問題に関するもの10点をこれに分類した。

シンガポールのイスラームの正統な解釈では、ホモセクシュアルはイスラームに反するものと考えられている³⁴。シンガポールにおいても、LGBTの人々を支援するイベント「ピンク・ドット」が2009年以降毎年開催されているが、2014年からはこれに反対するムスリムの人々の運動も起こっている³⁵。LGBTの問題は依然としてムスリム社会においては一種のタブーである。にもかかわらず、『プルンプアン』

は、10点もの関連するエッセイを掲載している。

10点のうち9点まではレスビアン、バイセクシュアル等の当事者であるが、1点はLGBTの人々に対する差別を批判する非当事者である【PI: 119-122】。エッセイの中には、レスビアンであることを隠し、露見を恐れる体験を描いているものや【PI: 53-57】、イスラームで禁じられていることをしているという後ろめたさを述べているものもあるが【PI: 137-141】、LGBTの間人も神が創造したものである以上イスラームが禁じるものではないと信じる気持ちを表しているものもある【PI: 107-112】。

4 分析 — 『プルンプアン』を読み解く—

(1) ジェンダーとイスラームの交差への対応

『プルンプアン』は、これまで声を上げることができなかったムスリム女性たちに発言の場を提供した。また、オピニオン・リーダーのような女性たちから最底辺の生活を経験した女性たちまで、幅広い女性たちの体験を明らかにすることに成功した。

以降では、ジェンダーとイスラームの交差への対応に注目しながら、『プルンプアン』が伝えるメッセージを読み解いていきたい。

政府はマイノリティであるムスリムに対し、結婚や相続など一部の私法の領域でイスラーム法の実施を認めている。ムスリム社会において保守的な宗教志向が強まっている中では、このようなイスラーム法の規定を見直すことは、ムスリム社会の多数派の支持を得ることにはならない。ジェンダー平等の観点からその見直しを訴えることは、イスラームをないがしろにするものであり、かつ、特別な権利を自ら返上しムスリム社会の利益を損なうものと認識されることになる。

AWAREが実施したGender Equality IS Our Culture プロジェクト（GEC プロジェクト）は、イスラーム法の問題を念頭に置いているが、「文化的慣行」の見直しを訴え、イスラームを前面に出さなかった。女性NGOがジェンダー平等に反すると考えるムスリム社会の人々

の意識や慣習の多くは、イスラームに基づくものとムスリムたちから理解されている。「ジェンダー平等は私たちの文化だ」というプロジェクト名は、そうした意識や慣習はイスラームではなくムスリム社会の「文化」に基づくものであり、また、本来ムスリム社会にはジェンダー平等の「文化」があるという主張を含む。AWAREは、このような主張をすることで、イスラームとの衝突を回避しながらジェンダー平等を追求しようとしている。

GECプロジェクトの一環として出版された『プルンプアン』においても、「ジェンダー平等は私たちの文化だ」という主張が繰り返される。

「身体性」に関しては、女性の身体の管理は「文化」の問題であること、FGMがクルアーンに根拠がない「文化的習慣」であること、ムスリム社会の結婚観は「文化」の問題であることが主張されている。「社会的期待」に関しては、「女性に高い教育はいらない」という考え方は宗教に根拠はなく、「文化」に根付く家父長制的な考え方だと論じている。以上のように、ジェンダー平等をはばむ様々な問題を「文化」の問題として論じることで、イスラームからの切り離しが試みられている。

『プルンプアン』では、イスラームの信仰について女性たちが語る部分も多い。ある女性は、「正しい服装」が正しい信仰と結びつけられることに対し、信仰は心の問題であり服装とは関係がないと主張する。別の女性は、ムスリム女性が体を露出するのは望ましくないとされることに対し、自分が演劇で体をさらすことは自分の「ジハード」だと言う。「古いイスラームの解釈に従うのではなく」、「ムスリムの女性とは何なのかを自分たちで決定するべきだ」と述べる女性もいる。

『プルンプアン』の寄稿者たちはイスラームの教えを否定していない³⁶。彼女たちの多くは、現代社会にふさわしいイスラームの解釈が必要と考え、彼女たちが正しいと信じる信仰の形とジェンダー平等とを同時に追求している。彼女たちの意識には、「イスラームとジェンダー的公正の対立」という「単純な二項対立」的な図式は見られない。

むしろ、「イスラームを通じてジェンダー的公正とは何かを問う試み」が行われていると理解できる。

イスラーム法の問題は『プルンプアン』ではわずかしき扱われていない。ある寄稿者は、大叔母が相続争いに巻き込まれた経験から、イスラーム法の相続ルールに疑問を持った経験を紹介している【PII: 88-92】。別の寄稿者は、複婚の相手だった男性から暴力を受けたことから、複婚に対し否定的な意見を述べている【PII: 209-217】。イスラーム法の問題に触れているのはこれら二点のみである。

まとめると『プルンプアン』は、ムスリム社会のジェンダーをめぐる問題を「文化」の問題として理解し、宗教ではなく「文化」の問題であるからムスリムはそれに拘束される必要はなく、変えていくことが可能だと主張するのである。また、彼女たちは自分たちが正しいと考えるイスラームの信仰を追求し、「善きムスリム」になることを目指している。イスラーム法そのものについてはほとんど触れていない。女性たちは、イスラームを批判することが目的ではないと主張することができる。このように、『プルンプアン』には、ジェンダーとイスラームの交差に対応する試みがみられる。

(2) 『プルンプアン』が残した課題

『プルンプアン』がFGMやセクシュアリティの問題などセンシティブな問題を扱っていることから、その出版に中心的な役割を果たした女性たちは、ムスリム社会の保守層からのバックラッシュを想定していた。しかし、意外にもそのような目に見える反応はなかった。彼女は、『プルンプアン』に書かれていることすべてが実際に女性たちが体験した事実であり、問題の存在自体を否定することが難しかったからではないかと理解している³⁷。ネガティブな反応としては、ムスリム社会の女性NGOから、ムスリム社会の「恥ずかしい部分」をさらすことへの懸念が伝えられた程度であった³⁸。しかし、実際にはムスリム社会

の保守層の間に『プルンプアン』への大きな反発があったことが後に明らかになった。

『プルンプアン』に関わったムスリム女性たちは、GECプロジェクト終了後も、政府の基金を財源としたAWAREの助成を受けながら共同研究事業を継続することにした。しかし、2018年度に開始したこの事業は、助成が打ち切られたことにより、中途での終了を余儀なくされた³⁹。周辺状況からは、AWAREが政府の意向を受けた対応を取ったものと考えられる⁴⁰。AWAREに関わり『プルンプアン』にも寄稿した女性は、筆者に対し、AWAREは政府から独立して活動できる例外的な存在であるが、それでもなお、宗教に関わらないことを求められ、ムスリム女性に関わる構造的な変革を求める取組みを行うことは困難であると言う⁴¹。政府は、ムスリム社会の『プルンプアン』への反応に強い懸念を持っていたのである。ムスリム社会は公に不満を表明しなかったが、『プルンプアン』への反発は強いものがあったと考えられる。

『プルンプアン』が広範な支持を獲得することはやはり困難であった。保守化が進むムスリム社会においては、女性も含め保守的な宗教志向が強まり、ジェンダー平等を訴えるムスリム女性は少数派にとどまる。ムスリム社会にはジェンダー平等の問題に取り組む女性NGOも存在しない。AWAREで活動する寄稿者の女性は、イスラームの公式見解を決定しムスリムに助言を行うシンガポール・イスラーム評議会 (Majlis Ugama Islam Singapura: MUIS) は、複婚やFGMについて見直しを求めても、常に「ムスリム社会が受け容れない (The community is not ready.)」という回答しか得られないと筆者に訴える⁴²。政府は、ムスリム社会の主流をなす保守層に配慮し、ムスリム社会のジェンダー平等への取組みにブレーキをかける。出版に中心的な役割を果たした別の女性は、政府が政治的意志を持って普及啓発を行おうとせず、変革を望まないムスリム社会のせいにするには納得がいかないと筆者に訴える⁴³。こうして、ジェンダー平等を求めるムスリム女性たちの

望む変化の実現には時間を要することになる。

『プルンプアン』は、「ジェンダー平等は私たちの文化だ」という主張を柱に据え、ジェンダー平等をはばむムスリム社会の意識について、イスラームという宗教から切り離して論じ、その是非を問おうとした。これがジェンダーとイスラームの交差への彼女たちの対応であった。

しかし、「私たちの文化だ」という主張にもかかわらず、実際にはジェンダー平等はムスリム社会に根付いた文化にはなっていなかった。このことは、『プルンプアン』で語られる女性たちの体験からも容易に推測できよう。そもそも、「私たちの文化だ」という主張が打ち出されたのが、そのように主張せざるを得ない状況があったからこそであった。女性たちがイスラームから切り離そうとしたテーマについても、イスラームに関わるものとのムスリムたちの認識を変えさせることはできなかった。結果として、彼女たちの取組みはやはりムスリム社会の反発を生み、GECプロジェクトの後継事業の実施に支障をきたすこととなった。その意味では、ジェンダーとイスラームの交差は回避できなかった。

しかし、『プルンプアン』での議論の内容は、ジェンダー平等の視点からムスリム社会に内在する問題に鋭く切り込むものであり、シンガポールのムスリム女性たちの市民運動の成熟を示すものであると言える。また、『プルンプアン』は、これまで語る言葉を持たなかった女性たちに、自分の言葉で語る場所を提供した。イスラームとの正面衝突を避けながら二回にわたり公に異議申立てを行うことに成功したとみることもできる。これらのことから、『プルンプアン』は、ムスリム女性たちが変化に向け歩み出した最初の一步であり、シンガポールのムスリム女性たちの市民運動の歴史上大きな意義を有するものであると言えよう。

結論

本論文では、『プルンプアン』の分析から、シンガポールのムスリ

ム女性たちの異議申立てにみられるジェンダーとイスラームの交差に彼女たちがどのように対応したのかについて考察してきた。

シンガポールのムスリム女性たちの事例は、「ジェンダー」と「イスラーム」の二つのマイノリティ性が交差する「二重のマイノリティ」の問題ととらえることができる。複数のマイノリティ性の交差が起こるのは、シンガポールのムスリム社会のみに限らない。「複合差別」に関する上野の議論のように、ジェンダー面からの公正はときに、階級、民族、障害など異なる次元の公正と衝突し複雑に絡み合う。ジェンダー平等の追及においては、そうした複雑性への応答が求められる。本研究の事例では、シンガポール政府がマイノリティであるムスリムに配慮し、宗教面からの公正を優先することで、ジェンダー平等は後景に退くことを強いられた。

こうした意味で、『プルンプアン』が取り組んだ問題は、シンガポールのムスリム社会における個別の問題であるだけでなく、世界の様々な社会に生きる女性たちが直面するジェンダー平等をめぐる一般的な問題の一つでもあった。『プルンプアン』は、その成功の要因、今後に残した課題の両方を含め、マイノリティ性の交差に応答しながらジェンダー平等を追求するという普遍的な問題に対応する試みの一つとして、参照する意義を有すると考えられる。

最後に、今後の研究課題について述べる。本研究は、『プルンプアン』の内容およびその出版に関わった関係者への聴き取り結果を中心に分析を行ったものである。ムスリム社会の宗教指導者、女性NGOおよび一般大衆の『プルンプアン』に対する認識については、主として『プルンプアン』の関係者による理解に基づき整理を行った。本研究を一層深めるためには、こうした他のムスリムたち、さらにはムスリム以外のシンガポール国民の認識について聴き取り等により把握・分析することが不可欠である。

- 1 この議論は、「女性」が数の面では男性と同等であっても、社会的な抑圧や排除の対象にされる「マイノリティ」とみなすことができるという考え方を前提としている。
- 2 上野千鶴子(1996)「複合的差別」『岩波講座現代社会学 差別と共生の社会学』井上俊ほか編、岩波書店、203-204ページ。
- 3 同上、207-208ページ。
- 4 同上、222-223ページ。
- 5 長沢栄治(2017)「研究プロジェクトの紹介」『イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて』長沢栄治編、日本学術振興会科学研究費基盤研究(A)「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」(IG科研)・東京大学東洋文化研究所、5-7ページ。
- 6 田村慶子(2004)「シンガポールにおけるジェンダーの主流化とNGO ―メモリトクラシーの厚い壁―」『東南アジアのNGOとジェンダー』田村慶子、織田由紀子編、明石書店、119-146ページ。
- 7 Shahirah Mahmood (2009) "Comparative Perspective of Muslim Activism in Singapore and Malaysia", *Igniting Thought, Unleashing Youth: Perspectives on Muslim Youth and Activism in Singapore*, Mohamed Nawab and Farhan Ali eds., Singapore: Select Publishing, p.72.
- 8 本研究は2020年に実施したものであり、世界的な新型コロナウイルス感染症の流行により、現地調査が不可能となったため、関係者からの聴き取りはEメールにより行った。
- 9 田村慶子(前掲書)、119-129ページ。
- 10 同上、129-137ページ。
- 11 Committee on the Elimination of Discrimination against Women, *Concluding observations on the fifth periodic report of Singapore*, 21 November, 2017.
- 12 *Consideration of reports submitted by States parties under article 18 of the Convention, Fifth periodic report of States parties due in 2015*, Singapore, 6 November 2015.
- 13 Department of Statistics, Singapore (2016) *General Household Survey 2015*. 以下、エスニック・グループ、宗教別の人口比は本統計による。
- 14 一般的には「マレー系」、「インド系」等と表記するところであろうが、本研究ではそれぞれこのように表記する。「中華系」についても「華人」と表記する。
- 15 市岡卓(2018)『シンガポールのムスリム：宗教の管理と社会的包摂・排除』明石書店：128-132ページ。
- 16 同上、140-145ページ。
- 17 同上、159-161ページ。
- 18 2001年9月11日の米国同時多発テロ事件、2001年～02年のシンガポールにおけるテロ未遂犯の拘束、2016年以降のISIS(イラクとシリアのイスラーム国)の台頭など。
- 19 市岡卓(前掲書)、148-155ページ。

- 20 同上、123-125ページ。
- 21 中村光男 (1999)「イスラム」『新訂増補 東南アジアを知る事典』桃木至朗ほか編集、石井米雄ほか監修、平凡社。
- 22 PPISのウェブサイト (<https://ppis.sg>, 2020年10月12日最終アクセス) より。
- 23 Shahirah Mahmood, *op. cit.*, p.72.
- 24 “NGOs divided on gender report”, *Straits Times*, 30 September, 2017.
- 25 AWARE (2016) *Perempuan: Muslim Women in Singapore Speak Out*, Wee, Vivienne and Filzah Sumartono eds., Singapore.
- 26 以降、『ブルンプアンⅠ』および『ブルンプアンⅡ』を参照する箇所には、このように頁を付して文中に表記する。
- 27 文学作品や娯楽小説などと異なり、誰もが関心を持つわけではない（むしろ関心が希薄な）マイノリティの社会問題を論じた本であることを勘案しての認識と考えられる。
- 28 Kamalia (2016) *Perempuan: A Review*, a post on AWARE's website on 14 December, 2016. (<https://www.aware.org.sg/2016/12/perempuan-a-review/>, downloaded on 13 October, 2020.) 筆者が参加した『ブルンプアンⅡ』の出版記念イベント（2018年8月31日）での関係者の発言でも、この点は強調されていた。
- 29 “Singapore comes under pressure over female genital cutting of babies”, *Thomson Reuters Foundation*, 13 October, 2016; “Why female genital mutilation still exists in modern Singapore”, *BBC News*, 21 November, 2016.
- 30 Eメールでの聴き取りによる（2020年10月8日）。
- 31 イスラームの教義において、自分に打ち勝つために努力する様々な行為を言う。
- 32 AWAREの関係者であり寄稿者である女性は、自分の知人のムスリム女性の100%がFGMを受けていたと語っている（Thomson Reuters Foundation, 前掲の記事）。
- 33 この女性のエッセイの冒頭のページに、開き直った表情でタバコをふかすヒジャブ姿のムスリム女性のイラストが描かれているのは象徴的である。
- 34 以下のシンガポールの宗教学者・宗教教師の団体による公表資料を参照。“Religious Guidance on Attending an Event that Supports Transgression”, *Singapore Islamic Scholars & Religious Teachers Association (Pergas)*, 20 June, 2016. (<http://www.pergas.org.sg/media/MediaStatement/Irsyad%20on%20Attending%20An%20Event%20that%20Supports%20Transgression.pdf>, 2020年10月19日最終アクセス。)
- 35 “Religious teacher launches 'wear white' online campaign”, *Straits Times*, 20 June, 2014.
- 36 ジェンダー平等とイスラームが両立しないと明言するエッセイは、棄教者の女性による1点のみである。
- 37 Eメールでの聴き取りによる（2020年9月24日）。
- 38 Eメールでの聴き取りによる（2020年10月8日）。
- 39 関係者からのEメールでの聴き取りによる（2020年10月24日）。
- 40 政府が種々の団体等に対しその活動内容の変更等を求める場合には、水面下

での指導が行われ、指導の内容や経過のみならず、指導を行ったこと自体が公にされない場合が多い。また、当該団体も政府の指導があったことを明らかにしようとしない場合が多い。筆者は本件について、周辺状況から政府の指導があったと確証している。

なお本件に関しては、AWAREの傘の下での共同研究事業が実施できなくても、ムスリム女性たちはそれぞれ独自の活動を続けることができるが、AWAREに対し「ムスリム社会の問題に関わるな」という政府のメッセージが送られたことの意味が大きいと考えられる。

41 Eメールでの聴き取りによる（2020年10月8日）。

42 Eメールでの聴き取りによる（2020年10月8日）。

43 Eメールでの聴き取りによる（2020年10月12日）。